セイフティダイジェスト、Vol.69, No.11, pp.2～8、
（公社）日本保安用品協会、2023-11

総　説

ポジティブ安全に向けて

明治大学　顧問　名誉教授
公益社団法人日本保安用品協会　特別会員
公益財団法人鉄道総合技術研究所　会長
一般社団法人セーフティグローバル推進機構　会長　向殿　政男

1. まえがき

働く人の安全の確保は、これまで、ケガなどの身体的な傷害を受けない/させないようにするために、リスク低減することが主な活動であった。この活動では、機械設備の危険なところを無くす、働く人の失敗を無くし、ルール違反を無くす、といったものが主であって、どうしても下向きでネガティブな印象をぬぐいきれない傾向があった。リスクはゼロにならないという現実から、ゼロ災害を追求する安全の活動は、ゼロに向かっての永遠の努力となり、先の明かりが見えにくい、緊張を強いられ、精神的な負担の多い仕事になる。

安全の究極の目的は、「安全な環境で、健康で、幸せに」働くこと/過ごすことであるに違いない。そうであるならば、安全の活動は、これまでのネガティブ領域でのマイナスからゼロに向かっての活動だけでなく、より健康に、そして幸せ、安心、快適、やりがい等を求めるといったゼロからプラスへ向かってのポジティブな領域での活動にも目を向けるべきである、というのが本稿の「ポジティブ安全」の趣旨である。

このためには、安全という概念を身体的な「安全」という狭い意味だけでなく、これまでも対象とされてきた「健康」の領域、更に、生きがい、やりがいを以て仕事をするという心の領域（「ウェルビーイング」[1]）まで広げて、「安全、健康、ウェルビーイング」という本稿で定義する「広義の安全」を目標として、今後の労働安全衛生活動は取り組む必要があることを提案する。

2. 安全の定義

これまでの我が国の労働安全衛生の活動は、労働者が職場で働くときに、ケガをしないように（安全面）、病気にならないように（健康面）ということ、すなわち、「・・にならない」という否定形で表現される活動が主であった。この否定形の型がネガティブな印象を与える傾向は、以下の安全の定義からも見て取れる。

「安全」とは、通常、「危険でない」とか、「危害を受けない」とかのように、危険や危ない状態をまず想定して、それがない状態を意味している。従って、安全のためには、まず、危険な状態や危険なところ（危険源）を見出して、次に、それを削除したり、回避したりすることであった。更に、危害発生の可能性の程度をリスクという概念を用いて表し、危険源から受けるリスクの程度を下げるリスク低減方策を施したりすることであった。安全の厳密な定義として、ISO/IECガイド51[2]（安全の国際規格を作るためのガイドライン）のJIS版であるJIS Z 8051[3] には、安全は、「許容不可能なリスクがないこと」と定義されている（**図表 1** 参照）。すなわち、この安全の定義は、「許容することができないリスクがないこと」を意味している。二重否定になっていて、ネガティブな印象をぬぐい切れない。なお、工学の世界で広く認められてい

セ816_02_01ポジティブ安全_４校.indd 2　2023/10/23 16:15

＊（JIS Z 8051）
「**許容不可能なリスク**がないこと」

＊（ISO/IEC　ガイド５１）
「Freedom from risk which is not tolerable」
（許容することが出来ない**リスクからの解放（自由）**）

＊（旧JIS Z 8115 デイペンダビリティ（信頼性）用語）
「人への**危害**または損傷の危険性が，**許容可能**な水準に抑えられている状態」

図表１　安全の定義

図表２　労働安全衛生におけるマイナスからゼロ、ゼロからプラスに向けての活動

るこの安全の定義では、安全とは、許容可能なリスク（受け入れられるリスク）しか残っていない状態のことであり、現実には、リスクゼロは実現不可能な要望であって、この安全の定義では、決して、リスクゼロを要求していないことに注意すべきである。

3. 本来の安全の在り方について考える

従来の労働安全衛生の活動の主な考え方は、使用する機械設備のすべての危険源を同定して、危険源に対するリスクを許容可能な程度まで低減させて、残ったリスク（残留リスク）の存在を意識して災害が起こらないように注意して作業を行う、というものである。

労働安全衛生における安全の究極の目的は、前述したように「『安全』な環境に囲まれて、『健康』で、『幸せ』に働く」ことである。ネガティブ領域での安全の活動は、そのための基本である。しかし、それだけにとどまっていてはいけないはずである。安全の究極の目的にある“幸せ”の実現に向けて、安全の活動には、災害ゼロとともに、働く人を幸せにする活動も含むべきである。安全の活動は、これまでの事故削減、リスク低減といったネガティブ領域でのマイナスからゼロに向かっての活動だけでなく、幸せ、安心、快適、やりがい（ウェルビーイング）や安心感の向上等を求めるといったゼロからプラスへ向かってのポジティブな領域での活動にも目を向けるべきである（**図表２**参照）。この提案が、本稿での主題である「ポジティブ安全」という名称に繋がる。

安全が、本来、ネガティブ領域だけでなく、ポジティブ領域まで含んでいることは、実は、安全の元々の定義にも見て取れる。安全とは、「許容不可能なリスクがないこと」というISO/IECガイド51のJIS版の定義を紹介したが、ガイド51の英語での安全の定義は、実は、Freedom from risk which is not tolerable（許容することができないリスクからの解放（自由））となっている（**図表１**参照）。ここでは、freedom（解放、自由）という言葉が使われている。安全の定義には、元々、解放、自由という前向きな概念が入っていたのである。この英語の安全の定義を筆者は、次のように解釈している。リスクはゼロにならないのは明らかだが、受け容れられる（許容可能な）小さなリスクまで低減されたのならば、その存在を受け容れて、（自分で注意しながら）自由に明るく前向きに、安心して活動すること、それが安全の本意である、というものである。

4. ポジティブ安全に向けて

安全の目標をネガティブからゼロへ、そして、ゼロからプラスへと拡張することを提案する趣旨を、**図表３**で改めて説明しよう。これまでの身体を対象とした狭義の安全（safety）は、負（ネガティブ）の領域での活動として、ケガをしない、傷害を負わない（身体的傷害がない）というマイナス部分をゼロにする活

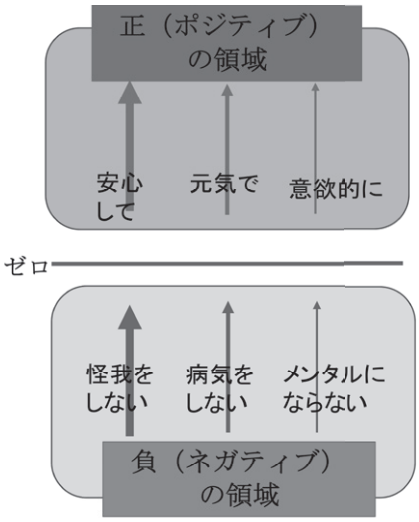
セ816_02_01ポジティブ安全_４校.indd 3　2023/10/23 16:15

＊これからの安全

- これまでの活動を基礎として、更に前向きに、プラスの方向にマインドを変えていく
- ゼロからプラスへ向かう努力
- 人々は、明るく、楽しく、前向きに、やりがい、生きがいを以て

＊これまでの安全

- 「身体的傷害がない」、「身体的病気、疾病がない」、「精神的障害がない」というように、「・・・がない」という、主としてマイナス領域での活動
- マイナスをゼロにする動き



図表３　これまでの安全とこれからの安全

動（ネガティブリスクの低減活動）であった。しかし、これを許容可能なリスクを受け入れて、リスクから解放され、ベネフィットを求めて前向きに、自由に、明るく、安心して活動できるという正（ポジティブ）な領域の活動（ポジティブリスクの増大）に拡張しようということである。これは安全だけでない。健康（Health）に関しても同様で、病気を無くす（身体的病気、疾病がない）というネガティブな領域での活動から、身体的にも、精神的にも、社会的にも良好で、元気に活動をするポジティブな領域に拡大することが望まれている。また、精神や心の世界でも、メンタルなどの精神的障害がないというネガティブな領域での状況から、やりがい、生きがい、幸福を求めて意欲的に働こうというポジティブな領域に活動を広げようとする考え方である。すなわち、これからの安全は、これまでのネガティブリスクを低減するという視点を加えて、更に、明るく、楽しく、前向きにポジティブリスクを増大させる方向も含めて考えようというものである。この新しい重要な考え方を（もちろん、昔からあったが、改めて）、ここでは「ポジティブ安全」と呼ぶことを提案する次第である。

ここで「ポジティブ安全」を改めて定義してみると、**図表４**のように、「安全は、危険源を探してそのリスクを低減するという活動だけでなく、前向きに、明るく、やりがいを以て働くというポジティブな側面にも目を向けた広い安全の活動」になるであろう。

ポジティブ安全とは
危険源を探してそのリスクを低減するという活動だけでなく、前向きに、明るく、やりがいを以て働くというポジティブな側面にも目を向けた安全の活動をいう。

図表４　ポジティブ安全の定義

この定義からも分かるように、ポジティブ安全には、モノ（機械設備）や組織（仕組み）だけでなく、人間の精神や心も関係していることが分かる。

セ816_02_01ポジティブ安全_４校.indd 4　2023/10/23 16:15

5. 安全におけるポジティブに向けての活動の動向

安全をネガティブ領域だけでなく、ポジティブ領域まで拡張して考えようという提案は、既に、これまでもいろいろな分野で行われていた。

まず、労働安全衛生の世界では、ビジョン・ゼロ（Vision Zero）[4] の活動がある。欧州を発祥地として、ビジョン・ゼロの活動が、現在、世界に広がりつつある。ビジョン・ゼロは、2014年のドイツで始まり、2017年にISSA（国際社会保障機関）が主導して世界的に広がりつつある活動で、現在、世界的な規模で、労働安全衛生の中心的な活動に発展しつつある。ビジョン・ゼロ活動の標語は、「安全、健康、ウェルビーイング」である（**図表５**参照）。「安全」だけでなく、身体的かつ精神的な「健康」を掲げ、更に、「ウェルビーイング（幸福）」まで、活動の目標を広げているのは特徴である。

安全（Safety）、健康（Health）、ウェルビーイング（Well-being）

図表５　ビジョン・ゼロ

本報告でのポジティブ安全も、労働安全衛生の世界において、ネガティブな面だけでなく、ポジティブに元気で、生きがいをもって働こうという視点から発想したものである（**図表６**）。

前述のビジョン・ゼロ活動では、既にその方向が示されていて、労働安全衛生の活動の評価に対して、これまでの事故数や死者数というネガティブな結果指標だけではなく、実行している良いところ、旨く行っているところ、未来への目標等のポジティブな前向き先行指標（PLI：Proactive Leading Indicator）も含めて用いるべきであると提案している。更に、古くは、ホルナゲル[5] は、危険源や悪いところを探して潰すSafety Ⅰから、良いことところや旨く行っているところを探して伸ばすというSafetyⅡへの移行を提案している。一方、心理学の分野では、マーティン・セリグマンがポジティブ心理学[6] を提案している。心理学は、従来の精神障害や人の弱みや短所に焦点を当てるだけでなく、幸福を求めて強みやより良い状態になることも研究すべきであるとしている。これに関して、セリグマンは、精神障害を無くしてフラットにしたところで人は幸せになるわけではないと述べている。

	ネガティブ的な要素 （従来の考え方）	ポジティブ的な要素 （新しい考え方）
ビジョン・ゼロ	結果指標：過去の事故の数、死者数を数える	先行指標：良いところ、旨く行っているところを評価する
労働安全衛生 （ポジティブ安全）	怪我をしない、精神障害にならない	元気にやりがい、生きがいをもって
Safety Ⅰ, Safety Ⅱ	危険源、悪い点を探して潰す	良いところ、旨く行っているところを探して伸ばす
心理学 （ポジティブ心理学）	精神的障害や人間の弱さを通常の状態に戻す	通常の状態から幸せな状態にする

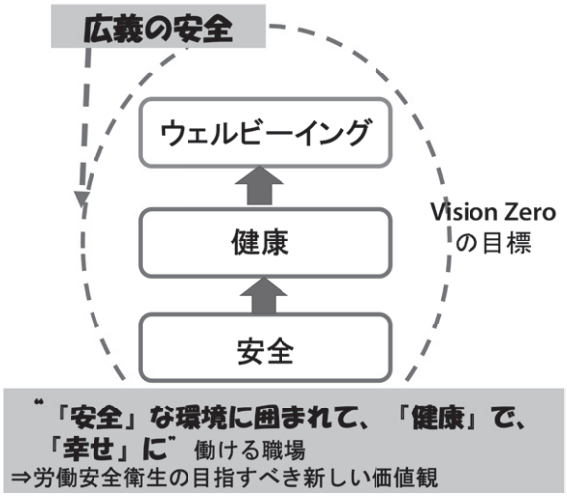
図表６　安全に関連したポジティブに向けての動向例

セ816_02_01ポジティブ安全_４校.indd 5　2023/10/23 16:15

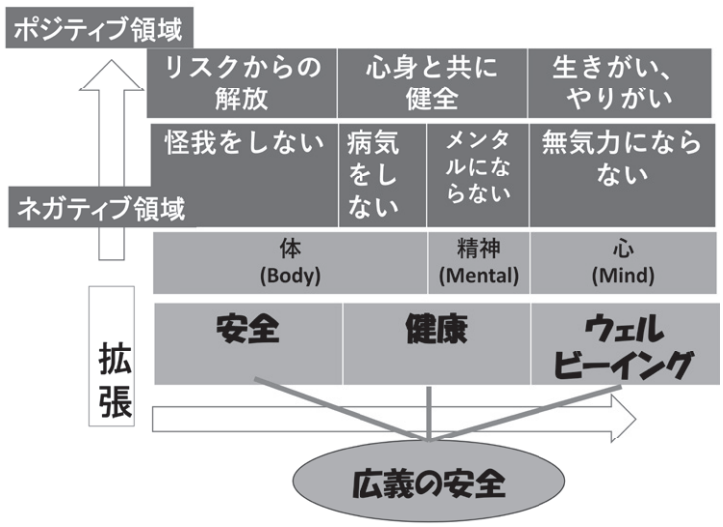
6. 安全概念の拡張とポジティブ安全

ポジティブ安全の概念を、更にしっかりと内容のあるものに拡張することを考えてみる。まず、安全の概念を二つの方向に拡張する。一つは、従来の安全が、主として身体的な怪我や傷害を対象としていたのに対して、更に精神および心の在り方まで対象に含めるように安全の概念を拡張する方向である。「これまでの狭い意味の安全を基礎にして、健康な心身で、やりがい、生きがいをもつ」という広い意味での安全を考えたい。これは、労働安全衛生においてビジョン・ゼロ活動が掲げた目標と同じであり、ビジョン・ゼロにならって、「安全、健康、ウェルビーイング」の三つとしてとらえて、これを一緒にして「広義の安全」と呼ぶことにしたい（**図表７**参照）（脚注参照）。もう一つの拡張の方向は、これまで述べてきたように、従来の安全が、危険がない、ケガをしないといったネガティブな領域でのリスク低減を目指す傾向があったが、安全の概念をもっと自由に、前向きに、明るく安心して活動するようなポジティブな領域にまで拡張したい。

上記の考え方で、改めて「ポジティブ安全」を**図表８**で紹介してみよう。**図表８**では、横軸方向に、広義の安全として、従来の安全（safety）を健康（Health）とウェルビーイング（Well-being）に拡張している。更に縦軸方向に、上記三者の内容をそれぞれネガティブ領域からポジティブ領域に拡張している。人間を体（Body）、精神（Mental）、心（Mind）に分けて考えている。従来のネガティブ領域では、「安全」に関しては、体の肉体的な部分を対象に、怪我をしない等の身体的傷害がないことを、「健康」に関しては、体を対象として病気や疾病がない、精神を対象としてメンタルや精神的傷害がないことを、そして、「ウェルビーイング」に関しては、心を対象としていて、無気力でやる気がない状態を表している。これらのネガティブ領域におけるマイナスからゼロに向けての



図表７　広義の安全



図表８　ポジティブ安全

（脚注）これまでは、ウェルビーイングの方から安全側に拡張して「広義のウェルビーイング」[1] と呼んだが、ここでは、安全側からウェルビーイング側に拡張して「広義の安全」と呼ぶことにする。

セ816_02_01ポジティブ安全_４校.indd 6　2023/10/23 16:15

プラス方向の努力が従来の労働安全衛生での主な活動であった。これに対して、新しいポジティブ領域では、「安全」に関しては、前述のようにリスクから解放されて、ベネフィットを求めて、自由に、安心して行動できることを、「健康」に関しては、心身ともに、精神的にも、社会的にも良好な状態で元気に行動すること、「ウェルビーイング」に関しては、生きがい、やりがい、幸福を求めて意欲的に働けること、をそれぞれ表している。これらのポジティブ領域でのゼロからプラスへ向けての活動を、新しい労働安全衛生に加えたいというのが、「ポジティブ安全」の提案である。

7. ポジティブ安全のこれから

ポジティブ安全の研究は、幸福やウェルビーイングの研究と手を携えてこれから進展させていくべき分野である。ただし、ここで紹介するポジティブ安全学におけるウェルビーイングの重要な視点は、働く人を対象にしていることである。幸福の追求を主な目的とする従来のウェルビーイングの研究と異なり、あくまでも身体的な安全の確保が基本で、更に心身ともに健康を維持した上で、ウェルビーイング（生きがい、やりがい）を通しての“幸せ”の実現にあることを忘れてはならない。

職場の安全衛生に関して、ネガティブな考えだと、文句ばかり言ったり、つい責任を追及したりする傾向が生ずる恐れがある。ポジティブな考え方を入れれば、主体的になり、自分でも考えて、一緒になって安全を守っていこう、創っていこうという積極的な気になるに違いない。企業の経営者の立場から見ると、企業によっては、ネガティブ領域での活動は、本来しっかりやっていれば起こらないはずの災害の減少に関するものであり、コスト意識が働き、災害が減ってくると安全に対する資金を削る傾向がみられる。しかし、安全におけるポジティブ領域での活動は、主体的な活動に基づいているので、安全性の向上とともに、生産性の向上にもつながり、経営者としては、安全にかける資金は、コストではなく投資と見るようになり、経営の最重要課題として取り組むようになるに違いない。

これまで築き上げてきたネガティブリスクの低減という活動には、非常に多くの実績があるが、ポジティブ領域での活動（ポジティブリスクの拡大）には、どのようなものがあるか、まだ、明確になっていない。これから関係者全員で模索し、考えていく必要がある。ポジティブ領域での指標、要因は人の心に係るので、アンケート調査等に頼らねばならないことが多いかもしれないが、北條理恵子博士（長岡技術科学大学）[7] が実施しているように、人間の表に出てくる行動を分析、評価して得られるような科学的根拠に基づくものが望ましい。

なお、ポジティブ領域のみに活動を集中させるのは趣旨に反する。従来のネガティブ領域での活動が基本で、それにポジティブ領域の活動を加えることが趣旨であって、両者は、一体となって進めなければならない。実際には、暗い職場では事故が多く、明るい職場では事故が少ないといわれている。ポジティブ領域でのゼロからプラスに向けての活動は、ひいては、ネガティブ領域でのリスク低減にも貢献することにもつながる。

ポジティブ安全の考え方を、できたら将来は、労働安全衛生の世界だけはでなく、更に広く、一般の人の日常の安全の概念にも広げていきたいものである。そうすれば、安全に関して主体的に、冷静に、理性的に判断するようになるだろうことが期待される。我が国では、一般の市民がリスクゼロの要求をしたり、安全に関するフェイクニュースに惑わされたり、風評被害に悩まされたり、中にはSNS等で偽情報を拡散したりする人々がいることが大きな社会問題になっている。ポジティブ安全の考え方が広がれば、これらの負の部分を防ぐのに多少とも助けになるのではないだろうか。各人が客観性を意識しながら、安全に関して、合理的に、冷静に考えた上で、各人の主観的価値観に基づいて判断に資するようになることを期待したい。これからの明

セ816_02_01ポジティブ安全_４校.indd 7　2023/10/23 16:15

るい、楽しい社会を作っていくためにも、ポジティブ安全の考え方は重要な鍵になると考えられる。

8. あとがき

筆者は安全の共通部分を体系化し、安全思想の下に、モノ（技術、自然科学）、組織・環境（規則、社会科学）、人間（人間の習慣と行動、人文科学）の三側面が協調して安全を作り上げるという安全学[8]を、長い間、提案している。この安全学には、既にポジティブの概念が入っているが、具体的に「安全とは本来、前向きでポジティブな概念である」[9]ことを言いだし、公開講座でも「安全学はポジティブな学門である」[10]と宣言し始めたのは、2017年頃である。筆者は、完全学に本稿で紹介しているポジティブ安全の考え方も積極的に取り入れ、これまでの安全学の一部を拡張して、「ポジティブ安全学」に発展させようと考えている。ポジティブ安全学は、ポジティブ心理学[6]にならい、労働災害やヒューマンエラーに焦点をあてて、リスクが許容可能な状態になって危険が安全になったところで、人は、幸せに生きられるわけではないと考える。それを基礎に、ポジティブな安全（安心、心身ともに健全、生きがい、やりがい）を求めることも目標とする必要がある。従って、今後は、ネガティブリスクと同様に、前述したようにポジティブリスクも研究すべきである。ただし、ネガティブ領域での目標であるリスクゼロの方向は一つであって、すべての分野で一致しているかもしれないが、ポジティブ領域での目標は、組織、分野によってそれぞれの価値観によって異なっていてよく、どのような価値観をその組織の目標とするか、そこには自由性があるはずである。

謝　辞

本稿を執筆するにあたり、ポジティブ心理学の存在をお教えて頂いた北條理恵子博士（長岡技術科学大学）、ポジティブ安全の展開に努力されているセーフティグローバル推進機構（IGSAP）の藤田俊弘博士及びIGSAPの皆様方、そして、本稿の執筆をお勧め頂いた加藤正弘氏（ミドリ安全株式会社）の皆様方に、感謝申し上げます。

【参考文献】

（1）向殿政男、安全、健康、ウェルビーイン、セイフティダイジェスト、Vol.68, No.11, pp.2～8、公益社団法人日本保安用品協会、2022-11

（2）ISO/IEC Guide 51, Safety Aspects-Guidelines for their inclusion in standards, 2014

（3）JIS Z 8051 安全側面－規格への導入指針、2015

（4）向殿政男、労働安全衛生の目指すべき方向とその世界的な動き～未来安全構想とビジョン・ゼロ活動～セイフティダイジェスト、Vol.66, No.11, pp.2-7, 公益社団法人日本保安用品協会、2020-11

（5）E. Hollnagel（北村正晴・小松原明哲監訳）, Safety-I & Safety-II 安全マネジメントの過去と未来, 海文堂, 2015

（6）マーティン・セリグマン、（監訳）宇野カオリ、ポジティブ心理学の挑戦－“幸福”から“持続的幸福”へ、2014

（7）北條理恵子、働く人のウェルビーイングの見える化と行動分析的手法による職場の改善、マネジメントシステム・リスクアセスメント分科会、全国産業安全衛生大会論文集、2023-9

（8）向殿政男、入門テキスト安全学、東洋経済新報社、2016

（9）向殿政男、“安全”という言葉、エッセイ、標準化と品質管理、Vol.70, No.2, pp.70-71、日本規格協会、2017-2

（10）向殿政男、安全学入門、明治大学リバティアカデミー公開講座、2017-4

セ816_02_01ポジティブ安全_４校.indd 8　2023/10/23 16:15